Yamatsubaki

山　椿

19

<気が付けば、42年>

司法研修所修了間近、刑事事件で高名な戸田謙先生に入所を誘われた。直前になって、迷いが出た。このままでよいのか。もっと、人生経験を経た方がよいのでは。先生の事務所に受諾の挨拶に行けず、2時間も事務所の周りをうろついた。「まあ、いいか。」と思って、先生の事務所を訪ねた。気が付いたら、42年経っている。あの迷いは、何だったのか。少しは違う道も歩んだ方がよかったかも。企業内弁護士、弁護士任官、任期付公務員など、様々な道のある今の制度は、昔よりずっと充実している。

<忙しく働き…>

イギリスの高名な弁護士が言った言葉が、記憶に残る。「弁護士は忙しく働き、贅沢な暮らしをし、貧乏なうちに死んでいく」。

「忙しく働き」というのは、本当にそのとおり。弁護士6年目ころ、初めてタイムチャージを採用してくれた依頼者がある。1か月で、200時間だった。公安事件をこなし、一般の民事事件をやり、戸田先生の会長選挙の選挙運動もしながらだった。事務所で新聞紙を体にかけて（意外に暖かい）寝たりした。

「贅沢な暮らし」は、夢のまた夢。家内と年2、3回、海外でゴルフをできるようになったのは、贅沢と言えば贅沢か。多少金離れがよい程度だろう。

「貧乏なうちに死んでいく」のは、リアリティーがある。宵越しの金を持たない気風から、なかなか抜けられない。さて、今後どうなるものか。

小原 健（26期）
●Takeshi Ohara

<千里の道も一歩から>

司法試験で刑事訴訟法を選択せず、修習生時代は、刑事事件に苦手意識があった。10年経ったら、刑事事件が得意分野。弁護士1年目から、朝から晩まで公安事件。弁護士は、事件から初めて学ぶ。報酬など、二の次、三の次。授業料なしで学べる。ありがたいことである。

<弁護士には、創造力が大切>

10年ほど前、サンフランシスコの法律事務所で、弁護士業務にはクリエイティビティが一番大切と言われた。これは、説教臭くなくて、今でも気に入っている。むしろ、逆だと思っていたから。

契約書にぴたりとはまる条項を持ってくる。様々な説得の手法を考え出す。器具を発明するように言葉やシステムを創作する。訴訟の立証活動もそう。あるタレントの英語の発音を揶揄して訴えられた新聞社を弁護したとき、原告は、自分の発音がネイティブの発音と言う。ハワイに行った際、旅行案内業者にその発音のテープを渡し、20名くらいにアンケート。原告の主張する意味にとった人はゼロ。費用は、旅行案内業者へ払った4000円。これで、事実上、原告は訴訟を取り下げた。それまでは、敗色濃厚。簡単なことだが、こんな工夫も創作のうち。見本はどこにもないから。どんな仕事も同じことだろう。

<歳を重ねて高まる能力がある>

ある高名な認知症の医学者は、高齢化はマイナスだけではないと言う。衰える能力もあれば、高まる能力もある。積み重ねた経験と思索の末にたどり着く長老の知恵のレベルが、確かにあるのだと言う。そこまでは、まだまだだが、将来を楽しみにできるのがよい。

<40年、弁護している刑事事件>

被告人と私の生があるうち、何とか無罪を勝ち取りたい、殺人のえん罪事件がある。依頼者には悪いが、もしかしたら、それも生きがいのひとつかもしれない。

Hanamizuki

花水木 19

森田 裕子（66期）
●Yuko Morita

私は、会社員、旅行会社の添乗員等を経て大宮法科大学院大学に入学し、法律を学びました。司法修習終了後、昔の上司から、ミャンマー連邦共和国のヤンゴン市にある会社で法務の仕事をしてみないかと誘われ、弁護士登録はせずに、2014年4月に渡緬しました。

ヤンゴンはミャンマーの経済の中心地ですが、まだインフラの質が低く、ほぼ毎日数十分から数時間の停電は当たり前でした。雨季にはタイヤが水没するほど道が冠水することも多く（日本人向けのフリーペーパーで「ヤンゴン冠水マップ」が特集されるほどです）、歩道に激しい段差や大きな穴があることもしばしばで、通勤時等の「ながら歩き」は考えられません。電車はほぼ機能せず、外国人の基本的な移動手段はタクシーですが、料金メーターがないため、乗るたびに値段を交渉するのが大変でした。おかげで、タクシーで使うミャンマー語だけは覚えられました。

商取引においても独特の習慣がありました。私は小規模の不動産開発会社にいたのですが、ミャンマーでは多くの土地を軍が所有していることもあり、借地の仲介者として「○×元大佐」といったような軍関係者が登場することがありました。地主との面談を待っている間に、民族衣装に身を包んだ元大佐とドーナツショップでお茶したりもしました。

日本と比べると非常に不便な国なのですが、敬虔な仏教国であるミャンマーでは親切な人も多く、私は、とても楽しく過ごすことができました。特に、ミャンマー東部のシャン州出身の同僚SanSanは、とてもきれいな発音で英語を話す若きエンジニアであり、ミャンマー語が全くできない私のために、いろいろと気遣ってくれました。また、私は、休日に僧院が開催している無料日本語教室でボランティアをしていました。そこで目にしたのは、平日は工場等で働く若者が、成功を夢みて、冷房もない僧院で休日に必死に勉強し、どんどん実力を伸ばしていく姿でした。現在のミャンマーが多くの人の関心を呼ぶのは、人々が与えられた環境の中で努力しつつ、未来を切り拓こうとする勢いがあるからであり、まさにSanSanや僧院の生徒さんたちがその象徴だと感じました。

ヤンゴン オフィスにて
（右:筆者、左:SanSanさん）

私は、ヤンゴンに2年程度滞在する予定でしたが、都合により約半年で会社を辞めて帰国しました。

そして、昨年1月にようやく弁護士登録したものの、しばらくはアルバイト生活をしていました。そのころ、国際委員会嘱託弁護士募集のお知らせを目にし、その面接の際には「即独で大丈夫？　困ってない？」と、はなさき記念館を紹介していただきました。こうして、現在は嘱託業務をしながらはなさき記念館に事務所を構え、週に1～2日ほどは指導担当の先生から基本的な業務についてご指導いただいております。

ロースクール在学中からお世話になりっぱなしの二弁に少しでも恩返ししつつ、いつの日かまた、面白そうな地域に飛び出してみたいと考えております。